男を女を御大切に

釜ケ崎の病気といえば、すぐ思い浮べるものの一つに「性病」がある。これは「性病」のもつイメージが「不潔」「悪」というようなもので、簡単に釜ケ崎のイメージと重ねてしまうからだろう。しかし、その実状はどうか。意外と思うかもしれないが、釜ケ崎に性病が多いというのは、すでに昔のことになってしまったのである。その辺のところを、大阪社会医療センターの本田良寛先生から聞いてみたりした。

（編集委員T2）

性病が「花柳病」といわれていることは良く御存知だろう。これは一般的に職業女性からうつされる病気という意味だ。もちろん釜ケ崎では職業「男性」の問題などもあり、こういう上品な呼び名は似つかわしいとも思えない。

性病には四つある。おなじみの「梅毒」「りん病」と軟性下疳、そけいリンパ肉芽腫というのがそれだ。後の二つはあまりおなじみではないので簡単に説明しよう。

◎軟性下疳は別名ローソク病といわれ男のナニがローソクみたいになってしまうというおそろしい性病。感染して二、三日ですぐ化のうする丘疹ができ、男ではナニの先の皮、女ではアレの内側などにでる。症状が進めば、ナニやアレがズルズルになって、男なら金玉がポロッということになりかねない。

◎そけいリンパ肉腫は第四性病といわれ、またぐらのリンパがはれあがり、皮フがうんだりする。女ではナニがはれあがり、尿道がせまくなったりする。発熱や頭痛もともない、食欲もなくなる。

性病は亡国病と呼ばれたりして、江戸時代なんかわ江戸町民の五人に一人は梅毒にかかっていたという資料もあるくらいで、開国後に新しく外国から入ってきている点も見落せない。

最近よく週刊誌などで、団地族の奥様連中の間に梅毒がはやっているとか、女子高校生もかかっているというような記事がでている。売春を感染源とする性病は減っているのだから、この傾向は、開国ニッポン以来のことといえる。要するに最近の梅毒は、台湾など東南アジアでのディスカバー梅毒であり、梅毒が「ぜいたく病」に格上げされたことを示している。

絶滅かー釜ケ崎梅毒

良寛先生によれば、医療センターに来る患者の中で、梅毒に感染している労働者はほとんどいないそうだ。センターでわかっている梅毒患者は、昭和五一年で四人、五〇年で六人、四九年で一六人。減っていることはこれではっきりするが、新しく梅毒にかかった患者は四九年の三月の一人を最後にでていない。患者のほとんどは、他の病気でセンターに来て血液検査でたまたま反応がでたにすぎないのだそうだ。もちろん、台湾に行って病気をもらってきたなどという労働者なんかいるはずもない。

昔から関西は梅毒の多いところとされ、とりわけ釜ケ崎は、センターの前身である今宮診療所時代は大阪市内の患者数の過半数がいたのである。しかし十年以上たった今日、釜ケ崎梅毒は姿を消したかのようである。もちろん、センターに来ることのない「患者」に確実にいるのだろうが。

軟性下疳、そけいリンパ肉芽腫の性病患者は、センターの数字にもあがっていない。それにひきかえ、「りん病」は、昭和五一年に八一人、五〇年に七〇人、四九年に九三人というけっこう大きな数字となってあらわれている。結局、釜ケ崎性病はりん病だけということか。

りん病はナニをしたあと一ー八日で小便するときに痛みがでて、そのうちうみがでてくるということは良く知られている。りん病は、きちんとペニシリンを二〇日間位飲みつづけると簡単になおってしまうので、決して恐い病気ではない。

ほほ横ばいーりん病

センターにかかるりん病患者は、ほとんど男で、女はごくまれにしか来ないという。男の患者から感染源の女がわかっても、女は絶対病院には来ないのだそうだ。このことがりん病が減ることのない理由の一つとなっているのである。

どこからもらってくるのか？　まず飛田かいわい。とりわけ本通商店街が多く、新世界、天王寺公園組が多いという話だった。飛田新地もまだまだあるとのこと。中にはタダでやらせてもらって病気までもらった人もいる

から、一応「安いあそび」は要注意ということだろう。
オカマも安心してはいけない。りん病は何も前とは限らず「直腸りん」というやつもあるのだ。このケースも実際に釜ケ崎で何例か報告されているので注意するにこしたことはない。
もらはないためにはどうしたら良いか。
まず、皮一枚あるとないとでは大分ちがうが、やっぱりコンドームを使うこと。りん病は粘膜から感染するから、これが一番基本的なことだ。一番確実な方法は、直前か直後にペニシリンを飲むことだが、これは薬局に行ってもわけてくれないから、結局コンドームを必ず使って事後処理を確実にすることしかない。あとで小便すればいいとか、洗えばいいという話もあるが、これは絶対ウソ。

マラも身のうち

良寛先生いわく「マラも身のうち、大事にせえ」「わずか十数センチのものでも、立派な体の一部。ナニをするのは人間としてあたりまえのことだから、女を買うなとはいわん。だけど病気には気イつけえ！」ということである。
さらに「アンコが女に意欲をなくしたらおしまい」ともいう。そしてセンターに来るりん病患者は一概に向上心の強い人が多いといい、酒におぼれて体をこわすことよりもはるかに健康的なことだというのである。
ここでT2としても、売春の是非についてとやかく言うつもりはない。そして売春を励讃するつもりもさらさらない。ただ、あまりに女が少なすぎるこの街で、健康な男を前にしてナニをするな、なんてことが言えるかどうかである。
T2が言いたいことがあるとすれば、それは女に対してである。あんたらも御身大事なら、ちゃんと病院に行けというのである。
男に対して「背負わせたった」なんてニンマリ笑う女の複雑な問題ともあわせて、「帝国主義社会の下層において より貫徹された女性差別の問題云々」を抜きにした男の身勝手な意見だとの批判がでるかもしれない。そして警察との関係も問題となるだろう。男のりん病よりも女のりん病の方がこわい、ということもあわせて、でも、やはりなのである。
良寛先生いわく「女は〝心だ、心だ〟とよく強調したがるが、結局はアンコと結婚したがらん」　T2もアンコと結婚したがれなんてことは言わないが、釜ケ崎性病を考える中で、女のエゴがちらちら気になったのは良寛先生と同じであった。御身御大切に！